

mind renovation

都市に消えた文化から

福田 章

制作主旨

スクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきた利益優先の商業主義を見直し、建築の保存、再生の重要性が高まってきている。なぜ古き良き建築が無惨に壊されていくのか？都市の中に積み重ねられてきた歴史や文化が無惨にも見捨てられていくのか？一部の人がいくらか危機感を持っていても、そこに住む人々の理解がなくては変わらない。人々が自分の住んでいる都市に理解を示さないことの一つは、従来のコミュニティのあり方と、今の都市に住んでいる新旧多くの人々の生活サイクルが大幅にずれているからではないだろうか。特に問題なのは後からその土地に移り住んできて、比較的短いサイクルでそこを去っていくいわゆる新住民は、その土地に距離的にも心情的にも遠い存在であり、その土地に理解、愛着が持てないのである。

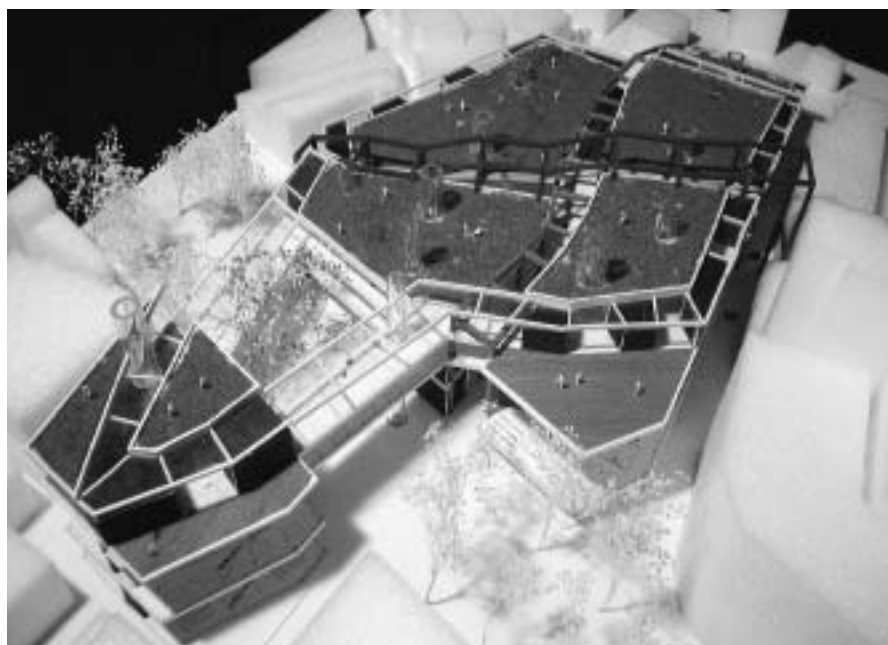
今、ここ阿佐ヶ谷では、まさに消えゆく阿佐ヶ谷文士の痕跡と、それを惜しむ旧住民がいる。そして、その文化の存在すら知らずに、街の都市的発展のみを望み、知らず知らずの内にここ阿佐ヶ谷の文化、風土を破壊してしまっている新住民がいる。私は、単に一つの建築物の保存・再生以前にこれらの社会の流れを作り出した背景、都市に住む人々の心に着目し、本質から変えようとした。ここ阿佐ヶ谷に本当の意味での身近なコミュニティ施設を提案する。これによって、住民の手で阿佐ヶ谷の文化、歴史が再生されることを切に願う。

講師評：若色峰郎・渡辺富雄

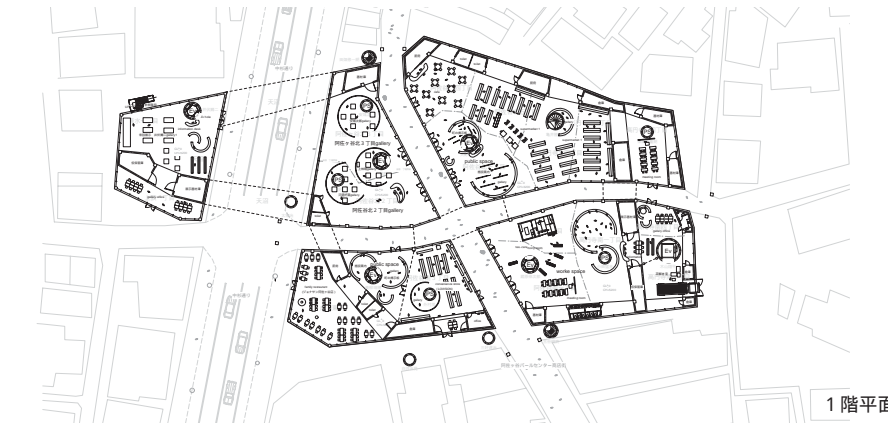
この案は、都市の中の埋もれた、あるいは忘れ去られつつある昔の記憶、歴史、文化といったものを建築を通して視覚化、意識化させようということであろう。

かつて阿佐ヶ谷駅を中心に住んでいた15名の文士の旧居の位置関係、駅周辺の道路網、町界などをトレースし、その形状を平面プランに利用するという大胆なアイデアである。そして、様々な店舗や公的な施設がその形状を縮図した形で渾然一体と配置されている。文士の旧居の位置はそれぞれの作家の展示スペースなどになり建物のコアを兼ねている。

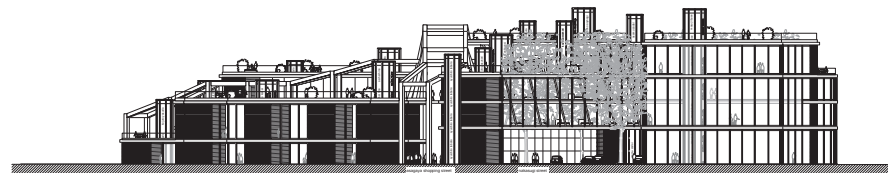
コミュニティセンターなどの館といったものを、日常の商空間のアクティビティの中に融合させ、新たなコミュニケーションを発生させようとする作者の意図は理解できるし、その楽しさはプレゼンテーションからもうかがえる。しかし、道路網や町界などをそのまま建築の平面プランに持ち込むことは、このスケールではあまりにも強引という感はある。もっと現実の敷地に擦り込ませるための周辺のスタディも必要であったろうと考えられる。次作での福田君の発展を期待する。



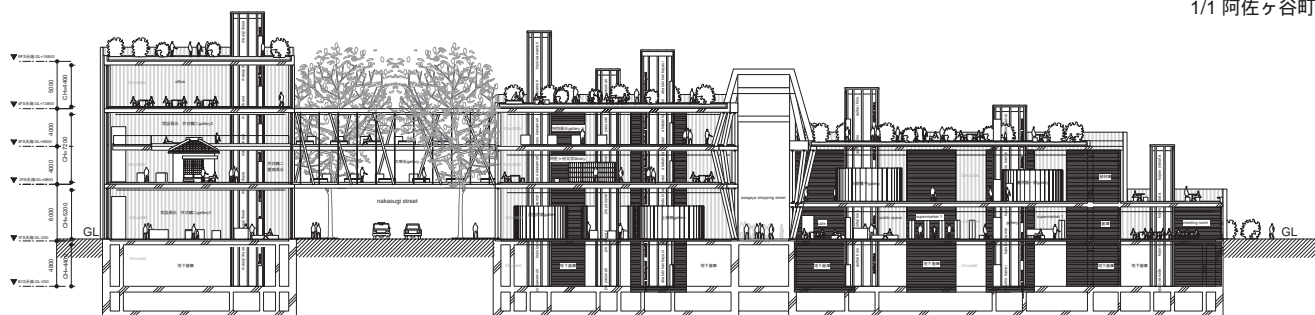
屋上階平面



1階平面



北西立面



断面



1/50 中杉通り



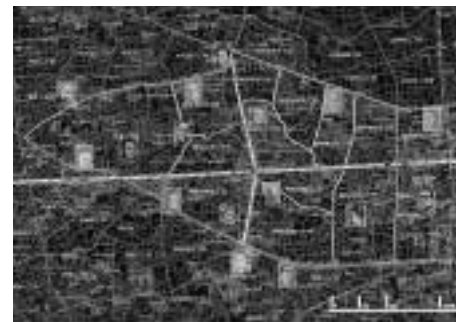
1/50 阿佐ヶ谷北四丁目商店空間



1/50 阿佐ヶ谷北四丁目市民ギャラリー



1/50 阿佐ヶ谷町空間



1/1 阿佐ヶ谷町地図